

健康文化

音の世界

若栗 尚

以前に朝起きたときに聞こえてくる音のことを書いたことがある。主に家の中にいて聞こえてくる音について書いたように記憶している。

これに対して、屋外での音について考えてみたのが日本の音百選のことであった。

私たちは、無響室などのきわめて特殊な環境（実は自分がいるということですでに無音ではないのだが）以外では音に包まれて暮らしているが、情報量の違いからか目に見えることほどには注意していない気がする。

最近、サウンドスケープという言葉がしばしば聞かれるが、これは生活を包んでいる音の景観を指すもので、騒音を考える基礎でもあり、文化のひとつの現れともとれるものとして、研究が進められている。

私達の毎日は実に多くの周囲の音に包まれている。しかし、無意識のうちに選択的な聞き方をされていて、興味のあるもの、気になるもの、必要と感じられるもののみを聞いている。

無意識のうちの選択的な聞き方を逃れて、聞こえてくる全ての音を聞くようにすることは、環境の音を考える上では、大変に大切なことではあるが、無意識な選択を行うことになれた私達にとっては、多少の訓練を要することである。

この訓練の方法にサウンドスケッチ、サウンドウォーク、サウンドマップの制作などがある。

まず最初に聞き取りの訓練をする。人によっては耳を開く訓練をするともいうものである。

室内で耳を澄ませて2, 3分間聞こえてくる全ての音を聞き、メモを取る。

これを繰り返すことで、今まで聞き逃していた多くの音に気づくようになる。
自分でも驚くほどの多くの音があることに気づくようになる。

室内での聞きとりになれたら、今度は、屋外での聞き取りをやってみる。

聞こえてくる音をメモし、紙の上に、聞こえてくる方向、音の聞こえ（擬音にしてみるのも良い方法である）（音色を色彩で表してみるのもおもしろい）、発音体の種類、距離、相互の位置関係を書き表してみる。

これが、普通、サウンドスケッチといわれている方法である。この方法になれたら、屋外、街などでの音について聞き取りをやってみる。

サウンドウォークとサウンドマップの制作である。

普通は、自分の住んでいる地域の特徴的な部分を選び、その部分の地図を用意して、実際にその部分を歩き、聞こえてきた音その場所に書き込んでゆく。

または、自分を地図の中心にして聞こえる方角に書き込んで行く。

これらの音は自然の音でも良いし、街の人々のたてる生活の音でも良い。とにかく、聞こえてくる、感じられる音を書き込んでゆく。気づいたことや感じたことは全て、例えば匂いなどについても書いた方がよいとする人もある。

書き込みの方法も文字、記号、色、姿形などいろいろであって良いが、後で、何人かのグループで話し合えるように出来ればよい。

自分の聞こえたものに対して、他の人たちがなにを聞いて、なんと感じたかは興味のあることでもある。こういう訓練を経て、人がなにを聞き、なにを好み、なにを嫌うかについての基礎を得ることが出来、嫌われる音をどう防ぐか、どう好まれる音に変えることが出来るかの示唆が得られることになる。

嫌われる音をいかにして好まれる音に変えるか、または、いかにして好まれる音で覆ってやって聞こえにくくするかは難しい問題である。

よく商店街などで使われるBGM等も人によって賛否両論があり、必ずしも意図した人の思惑どうりには受け取られないこともある。

にぎやかな雰囲気づくりと言う意味では有効なことも多いように感じていたのだが、そういう意図のものについても問題はあろうである。

全ての人々が満足するような音はないものであろうか。
NHKの世論調査部編の「日本人の好きなもの」（日本放送出版協会、1984）
によると日本人の好む音は下の表のようになる。

順位	音の種類	順位	音の種類
1	小川のせせらぎの音	11	ヒグラシの鳴き声
2	秋の虫の鳴き声	12	蒸気機関車の音
3	小鳥のさえずり	13	木の葉がざわめく
4	風鈴の音	14	ピアノを練習する
5	波が寄せる音	15	蛙の合唱
6	わき水の音	16	チャルメラの音
7	お寺の鐘の音	17	木枯らしの音
8	草原の風の音	18	学校のチャイム
9	雨垂れの音	19	鳥が羽ばたく音
10	船の汽笛の音	20	さお竹売りの音

この表を眺めていて、大部分については、順位は別にして、あまり異論はないのだが、さお竹売りの声があるのに金魚売りの声がないとか、犬の鳴き声、猫の声がないとか細かい点ではいろいろ思うことがある。

それよりもこの中で都会や大きな団地の子供などがもう殆ど聞くことの出来ないような音が多くあるように思う。そのうちに音を聞かされても何の音なのか判らないと言う事態も起こり得るように感じる。やはり、日常聞く音でその人の過去のいろいろな思い出、経験の上での親しみや感情も含まれて好ましいということがあるように思う。

こう考えると、もう既に私たちの世代の感じる好ましい音と若い世代の人たちの感じる好ましい音では部分的には相当に違いがあっても不思議はないように思う。無論、本質的に好ましいとして一致する部分の多いことは納得できるが……。

また、季節との関係も好ましきの中に入ってくる。

東和大学の佐々木実教授他の人たちによる福岡市の植物園での入園者の散策

中に印象に残った音の調査では、好感度の高かった音には、「壁泉の音」、「水生植物園の流水の音」、「広場の噴水の音」、「鳥の声」、「木の葉のざわめき」、「風の音」などの自然音があげられているが、好感度（好き嫌いの平均評定値にその音に気づいたひとの割合を乗じたもの）及び合致度（周りの景観と合う合わないの平均評定値にその音に気づいたひとの割合を乗じたもの）の季節に対する変化についても調査されており、面白い結果を報告されている。

上位3つの水の音についていえば、「壁泉の音」は夏、秋に好感度が高く、合致度は春に低く、秋に高い。「水生植物園の流水の音」は、夏に好感度が高く、春、秋に低い傾向があり、これは入園者の数によって、比較的小さいこの音の聞こえが影響を受けること、「広場の噴水の音」は四季を通じて好感度がそれほど変化しないことなどを始め、「風の音」が全季節の合計では好感度の高い部類にはいるが、寒さを際立たせるものとして冬には嫌われる傾向のあること、しかし、「風の音」の合致度は全季節を通して高い値であり、各季節なりにふさわしい音として受け入れられていることなどを述べられている。

こうしてみると、やはり、その音が聞こえる、聞こえないは、大きな問題であると同時に、受け手である私たちの方の経験等に裏打ちされた受け取り方も大きな問題であるといえる。

最近、マリー・シェーファーは、サウンドスケープの思想を社会に生かし、少しでも好ましい音環境を作る方策として、サウンドスケープ・デザインと言う領域を提案している。日本でも、いろいろな方面で、このサウンドスケープ・デザインは行われている。私たちの周りにもその実例は多くある。

騒音に打ち負かされているだけではなく、少しでも過ごしやすい環境を得るためには、現状での音のあり方をしっかり捕まえることが手始めであろう。

一人一人が、自分の周りの音を、今までとは違った見方、聞き方で捕らえなおしてみることが大切のように感じている今日この頃である。

((財)空港環境整備協会 航空環境研究センター)